



# 越中八尾 おわら風の盆

〜 晩夏にころざわめく〜

## Contents

---

- 4 越中八尾おわら風の盆 ～晩夏にころざわめく～
- 9 「番匠師」柿田 賢一 氏
- 13 古民家が日本を元気にする
- 15
- 17 匠主RUN
- 18 未来へつなぐ
- 19 新しく 懐かしく あたたかい 子どもの未来に贈る家
- 21 TOUCH WOOD!
- 23 「移住物語」徳島県 山本 文子 氏
- 25 連載小説「木は生きている」作・森 久美子
- 31 法律の羽根
- 32 ロングステイの力
- 33 古民家鑑定士おすすめ！全国古民家データベース
- 35 How to 古民家活用
- 36 全国ネットワーク



# 小説「風の盆恋歌」で全国区の知名度となった

「もう一度、一度きりでいいから、あなたと風の盆に行ってみてみたい……。ね、私を風の盆に連れて行って下さい。」

高橋治氏の小説「風の盆恋歌」(新潮社昭和六十年刊行)は、東京の新聞社の部長を務める男の、やるせない恋のラブ・パンチール(不倫)小説である。三十年以上前の刊行本であるが、八尾の街と祭りについて詳細に描かれており、当時からすでに観光バスが乗り付ける知人ぞ知る著名な盆踊りだったことなどが記されている。そして、この小説の刊行により「おわら風の盆」は全国に知られるようになった。

JR富山駅から高山本線猪谷行に乗車して五駅目が越中八尾駅だ。八尾は富山平野の南端に位置し平野が山に変わる場所にある。山(丘)と谷(平地)が複雑に入り組んだ地形ゆえに、特に風



が強いと言われる。

越中八尾駅前



福島地区と呼ばれる駅ができて以降に発展した比較的新しい街だ。駅前から約五百メートル歩いたところの井田川を渡ったところが八尾地区だ。八尾は小高い丘の上であり井田川から直線的な上り坂の街が約二キロメートル以上続く。この八尾地区の十の町(団体)と福島地区の合わせて十一団体が「おわら風の盆」の参加地区となるので、事前に調べて行かないと、広大過ぎて歩き疲れる。

八尾は、江戸時代中期から養蚕で有数の産地となり、大いに栄えた。その面影が美しい町並みとして保存されている。

## こころざわめく

筆者がこの祭りを知ったのは、二十年ほど昔になる。仕事の先輩が、毎年のように盆休みを九月頭にとるのだ。理由を聞くと、毎年「風の盆」に通っているという。奥さんが富山県出身であるにもかかわらず、奥さんは東京の自宅に残して一人で奥さんの実家のは夜ではなく朝。物静かな先輩が淡々と話し始めた。もし君がそこに行くなら、鏡町の踊りは必ず見なさ

## おわら風の盆とは

江戸中期(元禄)の八尾の街を挙げての祝いごとで、町民が三日三晩踊りあかした(三月)ことが発祥とされており、その後二百十日の台風を鎮め豊作を祈願する祭りに変化したと言われる。

踊りの総称である「おわら」の語源も定かではないが「大笑い」説、「大藁」説、「小原村説」などがある。「風の盆」の語源も定かではなく、富山県では仕事を休む日のことを盆日と呼ぶことから



台風を鎮め五穀豊穡を祈願するために仕事を休んで祭ると解釈される。(おわら風の盆行事運営委員会ホームページを参考)

い。そして、踊りが終わったあとも、街に残っていれば、深夜に夜流しの胡弓の演奏に出会えるかもしれない。そして、九月三日の祭り最後の日、朝五時に越中八尾駅に行きなさい。始発電車を、編笠をとった踊り子たちが見送っている。

私は、そんなに毎年行きたいほど良い祭りなのかと問うた。先輩は一言「良い。」とうなずいた。そのような先入観を植えつけられた私は、それ以来四度の訪問を繰り返している。

今なら先輩の話してくれた意味がわかる。心がざわめくのだ。



八尾地区の街並み



八尾地区の街並み



八尾地区からの風景



## 魅了される唄と演奏と踊り

歴史的には、初めに養蚕にかかわる民謡が養蚕業者のなかで唄われていて、それに地方の楽器演奏(胡弓、三味線など)が加わるようになり、その後、踊りが加わるといふ流れがあったようだ。おそらく、養蚕で栄えた八尾にやってくる商人たちをもてなす夜の宴席で芸者により披露されていたうちに、バージョンアップしていったのではないかと想像する。

地元では、「おわらを舞う」という。男性は黒い半纏はまぶさに編笠で手足を直線的に動かす。いっぽう女性は、淡い桃色等の浴衣に編笠で柳が風にそよぐ



ように力の抜けた仕草でゆるやかに舞う。踊り手は一言も発しない、さらに履物は薄い草履であり足音さえもしない。同じ盆踊りの阿波踊りが下駄を激しく鳴らし声を張り上げて乱舞するのは対極にある。

そして、この「おわら」の踊り方は時代とともに変化し、特に大正初期に日本舞踊の専門家たち指導のもと男踊りや女踊りが完成し、高度に洗練されてきた。

## おわら風の盆の見所

風の盆の行事は、保存会加盟十一団体により毎年九月一日から三日間開催される。近年は八月二十日ころから

前夜祭と称して観光業者向けのミニ風の盆を開催し、九月当日の混雑緩和を図っている。

もともとわかりやすく丁寧な説明を知るには「おわら風の盆行事運営委員会」のホームページを見ることだ。

風の盆期間中は、午後三時ころから開催地区のあちこちの路上で十一団体が町流しで踊りを披露する。あちこちとはいえ、無計画に歩いては出会えない。パンフレットでスケジュールをチェックだ。夜の混雑にくらべ、日中は比較的間近で見物することができる。

夕刻になると、踊り子たちの姿が消える。休憩時間だ。それを知らない観光客は、右往左往する。パンフレットをちゃんと見ればわかる。

初めて風の盆に行く人は、八尾小学校の演舞場でのステージ踊りを見ることをおすすめする。十一の団体が三日間交代で出演し、町流しでは観ることができないフルバージョンの舞を観ることができると、この演舞場は八尾駅から遠いので、遅れるとお年寄りでも坂道と混雑で血圧が上がる。

道踊りを見るにも、三味線の音が聞こえてからそちらに向かうとすでに二重三重の人垣ができていて編笠の先しか見えない。踊りがおこなわれるのはご祝儀を出す飲食店やお店の前が多いので、そこでじっと待つことをおすすめする。

鏡町かがみまちは、おたや階段の下に踊り会場が定位置としてある。会場の整理も徹底しており、早く行けば確実に観



oooooooooooo

写真スタジオ メモリヤ代表  
フォトグラファー  
かわさき ひでのり  
**川崎 秀典 氏**  
写真ブログ  
「美しい日本、この一枚。」  
<http://kono1.jp>

茨城県守谷市で写真スタジオを経営のかたわら、日本の「風景と伝統の祭り」を主なテーマとして撮影している写真家です。長年、日本全国を撮影してきましたが、それでもまだ見ぬ風景や祭りに出会いたいという情熱は増すばかりです。そして、その地にたどりついたとき、私の情熱を裏切らない美しい風景や感動の祭りを目にするのです。

富山県の古民家のご相談はこちら!

ることができると、また、踊りも艶があり、ころざわめく。

夜十時を過ぎると、踊る団体も減り、観光客の数はぐっと減少する。その頃からやってくる人達がいる。風の盆の常連客と考えて間違いない。彼らはこれから深夜まで風の盆と街の風情を楽しむのだ。

深夜十二時を過ぎる頃には、めっきり人影が減る。それでも六角形のぼんぼりに照らされた夜道の道端にしゃがみこんで何かを待っている人々かなりの数いる。午前一時過ぎ、遠くから何か音が聞こえる。その音が次第に大きくなる。胡弓の哀愁を帯びた音色に三味線の音。道端にいた人々がムックリと起き上がる。地方たちが、夜流しに繰り出してきたのだ。

地方じかただけの場合もあれば、少数の踊り子が先導する場合がある。夜流しの後ろをついていく人もいれば、道端でじっと聞き入る人もいる。誰もが無口だ。

風の盆最終日の早朝五時、もう明るくなった越中八尾駅の改札には長い行列ができていく。始発電車で帰る人々だ。富山行き始発電車と、猪谷行き始発電車がホームに入ってきて客が電車に乗り込む。そこに、駅前の福島町の踊り子たちが登場し、ホームに一列に並び「おわら」を舞始める。日中、決して編笠を脱がない踊り子たちが、この時は編笠をはずし素顔を見せる。

乗客たちは窓から手を振る。電車が発車すると、踊り子たちも手を振って見送る。

## 【最後に】

文章にも書いたが、行けばそこに祭りがあると安易に考える人は、広い会場で踊りの団体とニアミスを繰り返して、疲れと不満だけが残る。事前に保存会のホームページやパンフレットをよく研究していけば、類のない盆踊りに満足と、また来たいという思いが残る。

